
モンスターハンター 漆黒の風が進む道

蒼穹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 漆黒の風が進む道

【Nコード】

N9739J

【作者名】

蒼穹

【あらすじ】

漆黒の防具、ナルガシリーズを装備したハンター、カラスバ烏羽。

彼はハンターとして一人で生きてきたが、あるパーティーに出会って人生が変わる。

漆黒（前書き）

初めての連載なので上手く文章を書けているか不安です。
何かアドバイスでもあれば、助言お願いします。

漆黒

「ギャアアア！！！」

森の中に響いた断末魔の声は徐々に小さくなり、やがて静寂が辺りを支配した。

暗い森の中、黒い巨体が体中から赤黒い血を流して倒れている。

樹海の主、迅竜『ナルガクルガ』

その漆黒の体は翼膜を裂かれ、左脚が無く、右眼は潰れていた。疾風の如き俊敏さと慈悲無き攻撃を繰り返すその体は、見るも無惨な姿になっていた。

その傍ら、ナルガクルガの頭に手を置いて瞳を静かに閉じる一人の男がいた。

「お前の事は忘れない」

男は一言呟き、削ぎ取り用ナイフを抜き取ると、漆黒の体にその刃を突き刺した。

樹海の入り口

暗い森の中から足音無く、黒い影が這い出てきた。

それは星空の下、ズルズルと長い物を引きずりベースキャンプへと進んで行く。

「お前の武器は俺が使ってやる」

漆黒は静かに囁きながら引きずっていた物、ナルガクルガの尻尾や刃翼、爪や牙などをひとまとめにした物を慈しむように撫でる。

「その命、必ず無駄にはしない」

漆黒は呟きながら、歩き続けた。

漆黒（後書き）

内容は考えてあるんですが、上手く文章化出来ないの今はここまです。

次回作では文章をもっと長く書いて話を進めて行こうと思います。

騒がしい出会い（前書き）

2 話目、何とか書きました。

説明が足りなかったり表現が足りなかったりするかもしれませんが、アドバイスなどがありましたらお願いします。

騒がしい出会い

森の中にある街、『フォレスト』

そこは木の上に家があり、蔦で作られた橋が木と木の間を繋いでいる。

『フォレスト』には、街を二つに割るように、大きな川が流れている。

その川を一艘の船が、一人のハンターを乗せて街に入ってきた。

ハンターの名前は烏羽^{カラスバ}。

全身を漆黒の防具、ナルガシリーズで揃えている。

背中にはナルガクルガの素材で彼自身が作った漆黒の双剣『黒爪』。黒い鉤爪のような刃が三本ずつ、手甲に刺さっていて、どこか禍々しい光を放っている。

切れ味が高く、岩のような堅い甲殻も容易に切り裂いてしまう程の業物だ。

しかし、この武器は彼にしか作れず、工房では作る過程で強度が持たずに壊れてしまう。切れ味と強度をここまで上げる事は普通の工房では出来ず、また、素材も最高の物でないとこの武器は一気にその質を落としてしまう。

彼はハンターとしても、そして発明家としても優秀な存在なのだ。

彼は街の中心、ギルドの前に船を停めた。

岸に船を固定してから、採取したナルガクルガの素材を運び出す。引きずってギルドの中に入っていくと、紫煙と酒と油の合わさった匂いが押し寄せてくる。

ナルガヘルムの中、彼の眉が寄り、眉間に深いシワが走る。

この匂いは好きにはなれない。

早く報告を済ませて家に帰ろう。

そう思い、受付嬢に話しかける。

「はい、確かに。」

お疲れ様でした！」

笑顔で答える受付嬢に最低限の受け答えで済ますと、帰って休むために踵を返す。

「きゃっ！」びた〜ん！

と、後ろで悲鳴と床に生肉を叩きつけたような音が響いた。

何事かと足元を見てみると、見るからに駆け出しのハンターだと分かる女の子が大の字になっていた。

レザーライトシリーズに腰にはボーンククリ、腕には丸い盾が装着されている。

肩にかけていた袋からはいろんなアイテムが転がりでていた。

よく見ると、烏羽の運んできた素材、ナルガクルガの尻尾に躓いたようだった。いや、普通躓かないだろ！？

結構デカいぞ？ コレ（尻尾）

不注意にも程があるぞ！

そう思いながら、転がる女の子を見下ろしていた。

ていうか動かない。

倒れた姿勢のまま、ピクリとも動かない。

ヤバい、打ち所悪かったのかも。

動かない女の子を前に俺はどうしたらいいか分からず、ただ見下ろす事しか出来なかった。

すると、ギルドの入り口から慌ただしい足音と共に一人のハンターが大の字のままの女の子に駆け寄って来た。

「起きろ！」

「ニャー！！！」

そしてそのままの勢いで女の子の頭に拳を落とした。

ゴンという鈍い音と奇妙な悲鳴を上げて、女の子が跳ね起きる。

「何すんだ！ 馬鹿になったらどうすんだ！」

女の子は涙を滲ませながら殴ったハンター、フルフルシリーズで全身を揃える20歳位の女ハンターを睨みつけた。

「それ以上馬鹿にならないから安心なさい。」

「酷い！！！」

「本当の事でしょう？」

アナタの行動で利口だと思ったことなんてこれっぽっちも無かったんだから」

「何をう！」

そういうレイ姉えこそ、途中でキレて捕獲クエストで一体何体殺してるか分かったもんじゃないじゃん！」

「見てるだけのアンタが文句言ってるんじゃないよ！」

第一、その装備で私に着いてこようとする事自体馬鹿だって言うんだよ！」

「ほら、すぐにキレル」

「誰のせいだコラ！」

言い争いを始めた2人

見幕に押され、黙って見ている俺

「いつまで騒いでるんだ？」

そして、いつの間にか現れていたディアブロシリーズを装着した男が騒いでいる2人の頭に静かに手を置いていた。

「「あ」」

それまで騒いでいた2人がピタリと動きを止めた。

そして男の姿を見た途端、

「「ゴメンナサイ！！」」

2人は青ざめ、脂汗を流しながら土下座をした。

俺は自分の家でナルガクルガの素材を整理していた。

あの後、2人を正座させ、全身から冷え切ったオーラを出して説教を始めた男の後ろ、根本的な所の原因の俺はコッソリと逃げることにした。

あそこにいたら俺まで巻き込まれそうだったし、何より早く素材を整理して色々処理しておかないと質が下がるからな。

「何か疲れた」

素材の処理を終え、アイテムボックスにしまってからベッドに倒れ込む。

（そういえば、あの3人のハンターはこの街では見たことがないな）

ふと、そう思いながら俺は深い眠りに落ちていった。

騒がしい出会い（後書き）

1話目と烏羽のキャラが変わってますが、彼は狩りに行っている時と普段とで性格が変わるので、別人という訳ではありません。

新しく登場したハンター3人はこれから個々の説明も入れながら話を進めて行こうと思います。

喧嘩上等、殺気、笑顔（前書き）

連載遅くてスイマセン

途中途中どうしたらいいのかわからず、混乱しそうになりました。

喧嘩上等、殺気、笑顔

木々の間、朝日が差し込む中、俺（烏羽）は街の中央、ギルドを中心に広がる川沿いの朝市の中を歩いていた。

静かな森の中、この場所だけが活気に満ち溢れている。

所々で野菜や魚などを買いながら、朝の森の空気を味わいつつ散歩をしていた。

森の朝の空気は深呼吸をするとリラックスすると共に心が研ぎ澄まされる。

「あゝ！！ アイツは！！」

買い物は大体終わり、ギルドの前を通りがかった時だった。賑やかな朝市の中、一際大きな声が背後から聞こえてきた。

「待てコラゝ！」

「ゴフツー！」

そして背中に衝撃が走り、俺は地面を転がった。

「昨日はよくも逃げやがったな！ あの後アラ兄に一時間も酒場で正座で説教食らったんだかな！」

転がっている俺を見下ろしながら怒り狂う女の子。

大体15、6才位

ブロンドのショートカットで、ボーイッシュな印象が強い。

少し吊り目で睨みつけてくるが、どこか猫を想わせる双眸は月のような金色をしていた。

「立てコラ！ 昨日の礼をたっぷり返してやるからよ！」

「ああ、昨日の」

対して俺は地面に転がったまま、少女を見上げていた。

普段着のように装備を着けている俺と違って、少女はおそらくケルビの皮で作られた服を着ていたから、ダメージ自体は最小限で済んだのだ。

「サッサと立てコラ！」

今にも噛みついて来そうな形相で睨みつけながら怒鳴り散らす少女。

いつまでも寝転がっているのも周りの視線が痛いからとりあえず立ち上がり、体に付いた砂を軽く叩く。

「えっと、昨日はすまなかった。」

そして軽く頭を下げて謝る。

「すまなかったで済むかボケ！」

謝罪の言葉は意味無かった。

じゃあどうなるか？

「……金か？」

だが今は口クに持ってないぞ？」

「誰がテメーみたいな奴から貰うかカス……！」

……何て言うか、口が悪いな。
まるでチンピラみたいだ。

「じゃあどうすればいい？」

「こうすんだよ！」

そう言っと、いきなり顔面に蹴りが飛んできた

「うお！！！」

反射的に顔を横に曲げる。

耳のすぐ横をヒュツと風を切る音がして足が通り過ぎる。

「へえ、良い反応するな！
じゃあコレはどうだ！」

少女は地面に手を着き、そのまま回転すると連続で蹴りを叩き込んできた

「くっ！」

身軽に回りながら、まるで紐で繋がっているかのように、距離を離そうとする俺にくつつきながら尚も蹴りを喰らわせる。

衝撃を殺して出来るだけ蹴りを流しながら俺は更に後退する。
だが、後ろには壁があってそれ以上下がる事は出来なかった。

「終わりだ！」

片手で地面を弾くようにジャンプすると、空中で一回転して、トドメとばかりに踵落としての形で落ちてきた。俺はとっさに頭の上をガードする

「うわっ！」

しかし、あと少しで当たる所で少女は空中で止まり、そのまま後ろに飛んでいった。

「誰だコラ！」

まるで猫のように空中で体制を立て直し、地面に着地した。何て身体能力だコイツ

「何をやっている？」

少女の身軽さに感心していると、少女を投げた男は冷たい声で言う。

「あ、アラ兄！？」

「もう一度聞くぞ、何をやっている？ カリン」

「い、いいいや、何にもやってないよ！」

明らかに恐怖している顔で言う少女、カリンは顔面蒼白、冷や汗をダラダラ流しながら何とか言い訳を言おうとするが、現場を見られていただけに何にも言えず、ただ口をパクパクさせるだけだった。

「俺は言っただけだよ？」

「ヒッ!？」

ゆっくり近づきながら静かに言う。

一歩近づくと、カリンの震えが増える。

「あんまり騒ぐなど、言っただよな？」

「ご、ゴメンナサイ」

目の前まで近づき、見下ろしている男。

ただ話しかけられているだけなのに、まるでリオレウスを前にしたケルビのように震え続けるカリン。

そして俺は、そんな2人をただ見ているしか出来なかった。

いや、性格には動けなかったという方が正しいだろう。

少しでも動いたら殺される。

俺の全身に響く警告音が、体の自由を奪っていく。

コイツ、ただ者じゃない。

そこにいるだけで、何て威圧感があるんだ。

「帰るぞ」

威圧感だけでカリンを押さえながらクルツと体を反転すると、そのまま立ち去ろうとした。

「ま、待ってくれ!」

俺はとっさに呼び止めていた。

「なんだ」

こちらに背を向けたまま、まるで興味がないかのように答える？

「アンタの名前を、教えてくれないか？」

なぜこの時、こんな事を言ったのか？

ほとんど反射的に 口から出ていた。

「……………」

男は無言で振り向いた。

そして、まるで値定めでもするかのように、俺を見据える。

その間俺は、身動きをしないで、射殺されそうな視線を耐える。

首筋に汗が流れる。

時間にして数秒しか経っていなかったのに、何時間も経っているかのような錯覚を覚える。

「俺はアラシ。」

アラシ・フロストだ。」

ふと、時間が戻る。

そして、アラシが笑っていた。

喧嘩上等、殺気、笑顔（後書き）

改めて、第3話目です。

まず、一番出しやすかったカリン・フロスト。

喧嘩っ早い性格で、特技は足技。

かなり身軽で、狩りの時もその身軽さで、モンスターの攻撃を避けて一撃を加える。

言わば遊撃手というところ。

名前から分かるとおり、アラシの妹。

今回は出て来なかったが、「レイ姉」ことレイも兄妹で、アラシが長男（20）、レイがアラシと2つ下で長女（18）、カリンが末っ子（15）。

レイ、カリンとも、アラシに頭が上がらず、何かトラウマのようなものがあるようだ。

次回のあとはアラシの事を書きたいと思います。

また、何かアドバイスやダメ出し等、ありましたら、参考にさせていただきますい。

依頼（前書き）

今回の話は、最初モンハンらしく、フロスト兄妹と狩りに行く話に
でもしよつと思つてたんですが、何故かシリアスな話になってしま
いました。

だけど、コレはコレで気に入ったので、そのまま投稿します。

依頼

「依頼？」

「はい

おそらく、あなたにしか出来ない仕事です」

俺はナルガヘルムの上から頭を搔き、依頼主、アラシ・フロストを見た。

「俺よりも腕の立つハンターはいると思うんだけど」

「いや、これはハンターとしてもですが、発明家としての依頼でもあるんです」

その言葉で、俺は目を見開いた。

話は一時間前

俺は、アラシに連れられ、ギルドの中、酒場に腰を下ろしていた。

「先ほどは俺の妹が失礼な事をした」

座るなり、頭を下げて謝罪してきた。

「謝礼としては安いかもしれないが、食事を奢らせてくれ」

「いや、元とはいえばこつちが悪い訳だし、そんなに気にしないでくれないか？」

「それでは俺の気が済まない。
気にせず、好きな物を頼んでくれ」

強い眼光で言うアラシに、それ以上何も言えず、手頃なアプトノスのステーキを頼んだ。

数分後、俺、アラシ、カリンの前に鉄板に乗った巨大なステーキが置かれた。

ジウウジウウと鉄板の上で音を立てている肉の塊は、否応なく腹を空かせる匂いを放っている。

俺は軽く手を合わせ、命に感謝してからいただく。

フォークとナイフで肉塊を切り、口に運ぶ。

柔らかい肉を噛むと、肉汁が口一杯に広がり、口から溢れそうになる。

次々食い進め、食べ終わる。

「ごちそうさま」

ふたたび手を合わせ、もう一度、命に感謝する。

すると、正面に座る2人も食べ終わり、同じように手を合わせていた。

「へえ」

俺は思わず声が漏れた。

ハンターで、俺のように食べ物に感謝する人を今まで見たことが無

かったから、何か不思議な気分だった。

「さて」

アラシは感謝を終え、こっちに顔を向けた。

「改めて自己紹介をしよう。

俺の名前はアラシ・フロスト」

アラシはカリンと同じブロンドの髪を頭の後ろで一つにまとめた頭を少し下げながら自己紹介をする。

「そして、こっちが二番目の妹のカリンだ」

こちらもカリンと同じ金色の目を三日月のように細めながら、カリンを紹介する。

紹介されたカリンは、まるでにが虫を噛んだような顔になる。

「そして、あれが一番目の妹のレイだ」

と、アラシはギルドの入り口を指差した。

俺はそっちを見た。

そこには、丁度ギルドに入ってきた女ハンターがいた。

見覚えがあるフルフルシリーズが酒場内を見回し、俺達に気が付き、駆け足で近寄ってくる。

「アラシ兄さんとカリン、ここにいたんだ」

テーブルに近づき、空の皿を見るなり、

「うわっ、自分たちだけご飯食べてる
せっかく用意したのに」

と、2人への文句を言い出した。

どうやら2人は食事の前に来たらしい。

そして、食事を用意して待ってたが帰って来ず、探しに来たと。

「悪い、探し人が見つかったからついな」

アラシが女ハンター、レイを見て謝る。

「えっ？」

じゃあこの人が？」

「マジで？」

こんなヤツが？」

アラシの言葉に、レイとカリンが俺を見る。

「えっ？ 何？」

何故2人が俺を見るのか？

いや、その前に、

（探し人？）

こっちの単語の方が気になる。

「ああ

おそらく彼で間違いない」

俺に視線を戻しながらアラシが言う。

「それで、あなたが烏羽さんですよね？」

「あつ、ああ

確かに俺は烏羽だけど、何で俺の名前知ってんの？」

「この街では有名のようですから」

「この街では有名」という言葉に俺は眉をひそめる。

「ハンター」としては腕が立つ事で確かに評判は良いが、「発明家」の部分ではあまり良い印象では無い。

それは、過去にいろいろあったからだが、あまり思い出したくない。

「それより、あなたに用があつて探していました」

アラシがこれまでよりも顔を引き締めて言う。

「用？ 俺に？」

「はい」

心なしか、レイとカリンも少し緊張しているように見える。

「その用って、何？」

俺も若干緊張しながら答えを待つ。
すると、アラシが言った。

「あなたに依頼があるんです」

冒頭に戻る

「断る」

俺は内容を聞かず、スッと席を立つ

「何だよ!？」

カリンが怒りとも焦りとも取れる顔で迫ってきた。

「まだ内容も言っていないだろ!」

「分かるよ」

眼前に迫るカリンに俺は静かに言う。

「武器を作って欲しいんだろ？」

眼前のカリンが目を見開いた。

「何で」

「分かるかって？」

依頼主の顔を見れば分かるよ」

スツと、アラシを見る。

そこには普段どりのアラシがいるが、目の奥に、黒い炎が灯っていた。

俺はその炎がどういうものか、良く知っている。

だからこそ、この依頼は聞けない。

いや、聞いたらいけない。

「お願いします」

アラシが唐突に席を立つと、地面に額を付ける。

「俺達にはあなたの武器が必要なんだ」

土下座をして、懇願してくる。

そんな兄を、少し複雑そうに見下ろすレイとカリン。
しかし

「ゴメンナサイ」

俺はその場を走って逃げた。

あの光景は、嫌だ。

あの過去を、無理矢理思い出させる。

「ゴメンナサイ」

俺は、走りながら呟いた

依頼（後書き）

前回の宣言どおり、今回はアラシについて書きます。

フルネームはアラシ・フロスト

キレイたらとてつもなく怖い、フロスト兄妹の長男。

騒がしいのは好まず、狩りに行かないときは読書をしている。

装備は、全身ディアブロシリーズで揃える。

兄妹唯一のガンナーで、武器はディアブロスの素材で作ったディアブロアローを使用。

何でも、完璧にキレイな時に、本気で妹たちを射殺そうとしたらしい。

過去に何かあったらしい。

そこら辺は後々、本編にて。

次回はレイについて書きたいと思います。

惨殺（前書き）

更新遅くてすいません。

第5話、短いです。

長く書こうとはするんですが、なかなか書けません。

多分これからも更新が遅い割に短かったりするかもしれませんが、読んでくれたら嬉しいです。

惨殺

「クソッ！」

どこをどう走ったのか、覚えていない。
気が付けば街を出て、樹海の中を歩いていた。

「クソッ！クソッ！」

アイテムを全く持たず樹海に入るのはほぼ自殺行為なのだが、それすら気にならない。

「何でまたあの眼なんだよ！」

黒い炎

あの時と同じだった

「何でそんな事するんだよ！」

土下座

あの時もそうだった

瞬きをするたび、瞼の裏に黒い炎を宿した眼と無様に土下座をする
光景が交互に映される。

「ギヤアッギヤアッ」

いきなり、木々の間からランポスが飛び出て来て進路を塞いだ。

いや、囲まれた。

合計6匹

一定の距離を取ったまま威嚇をしてくる。

「うるさい！」

「ギャッ」

と、正面にいたランポスの頭に黒い鏃やじりのような物が刺さる。
頭蓋を碎かれ、そのランポスは頭を仰け反らせて、そのまま倒れる。

「ギャアッ？」

他のランポスは何が起こったのか分からず混乱する。

タンッ

ランポス達の視界がブレた。
そして、そのまま視界がブラックアウトする。

「酷いな」

街で烏羽を探し回ったが見つからず、樹海に走ったアラシ達は、ここで悲惨な光景を目にする。

辺り一面、ランポス達の亡骸が散乱していた。

血が地面を染め、青い鱗が付いたランポスだった物は地面に転がり、原形をほとんど留めていない。

「コレは、ここで何があったんだ？」死骸を調べながら、アラシは呟く。

「兄さん、コレ」

別の死骸を調べていたレイが何かを持ってきた。
黒い、鏝のような物

「何々？ 何か見つけた？」

少し離れた所で見ていたカリンが近寄ってくる。

「……………コレは」

レイからそれを受け取る。

「間違いない、彼だ」

「何で分かんのか？」

カリンがアラシの手の中の物を興味深げに覗き込む。

「コレって、なんかの鱗？」

「ああ、ナルガクルガの尾に生えている鱗だ」

それは、鱗とは思えない程の切れ味を持った、ナルガクルガの尾の鱗だった。

小型のモンスターならば一撃で殺す事が出来るほどの殺傷能力を持

っ。

「けど、何でコレでアイツだって分かんのか？
ナルガクルガに襲われただけかもしれないじゃん」

不思議がるカリン。

何故アラシはコレが烏羽の仕業だと言っているの？
声には出さないが、レイも同じく思っている。

「いや、コレは違う」

アラシは、その鱗を眺めたまま呟く。

「よく見てみる」

そしてそれを手のひらに乗せ、妹達に見せる。

「コレは加工されている。
それも、高度な技術によって」

レイとカリンは目を見張った。
アラシの顔を見て

「兄さん？」

「アラ兄？」

アラシの目が、見たことないほど輝いていた。
キラキラと、まるで何かに取り憑かれているかのように。

惨殺（後書き）

レイ・フロスト

フロスト兄妹の生活では、家事の大体を担当する。性格は、基本は温厚だがキレやすい。

カリンだけにはやたら厳しく、拳が飛ぶ事が多い。

防具は、全身フルフルシリーズで揃える。

武器は大剣で、ブレイズブレイドを使用。

だんだん主人公が烏羽からアラシに変わりそうで、何か不安になって来ました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9739j/>

モンスターハンター 漆黒の風が進む道

2010年10月10日02時55分発行